『古事記』の中のオノマトペ
――「塩こをろこをろ」の解釈と英訳

高　橋　憲　子

An Onomatopoeia in *the Kojiki*: Interpretation and English Translation of the sound *Koworo-Koworo* of sea water

Noriko TAKAHASHI

Abstract

This study analyzes the English translation of the onomatopoeia *Koworo-Koworo* — the sound of sea water being stirred that is, mentioned in the beginning of *the Kojiki*.

The two deities, Izanaki-no-mikoto and Izanami-no-mikoto, standing on the heavenly floating bridge, lowered the heavenly jeweled spear, which was given by the heavenly deity, and stirred the brine. While they stirred the brine with the sound *koworo-koworo*, the brine that dripped down from its end piled up and formed an island. This is the island of Onogoro .

The birth of this island was the first step at making the land where the emperor governs. Moreover, the phrase *koworo-koworo* was included in a ritual song in the section on Emperor Yuryaku in the human era. Therefore, it is said that the phrase *koworo-koworo* plays a role in intoning celebrations to the emperor's power by inducing people to go to the mythical space of the birth of the island of Onogoro.

Though we can only imagine the sound of stirring action, three English books translated it as follows: "curdle-curdle" in B.H. Chamberlain's translation (the first edition,1882), "a churning-churning sound" in D.L.Philippi's translation (1968), and "sloshed and swished" in G. Heldt's translation (2014).

This paper will retain its romaji notation, because *koworo-koworo* did not merely represent a sound, but appears to have been regarded as a word to mean "fulfilment of one's wishes" and celebration of the emperor's power. Therefore, the author will translate "the sound *koworo-koworo* of sea water" as a trial and add some notes to explain the meaning of this expression as described above.

1．はじめに

『古事記』の音表現の中には、「こをろこをろ（に）」「もゆら（に）」「さやさや」「かわら」「さわさわ（に）」「たしだし（に）」といった擬音語や「ほらほら」「すぶすぶ」といった擬態語が見え、これらはほとんど万葉仮名で記されている。和文体漢文である『古事記』の文章の中で、こうしたオノマトペを表わす手段として万葉仮名を用いることは編纂者の工夫のひとつと思われ、それによって、それぞれの事象に対する古代人の感覚、観念を言葉を通して知る手がかりが提供されている。神話には、野椎神（ノ（野）＋ツ（連体助詞）＋チ（霊））など、自然界に存在するものが、そのまま神名として用いられている例が多くあるように、自然界の音や動きをことばとして写し取ってつくった擬音語・擬態語にも、古代人の観想が反映されている。そうした擬音語のひとつに、『古事記』冒頭の開闢神話で伊耶那岐命（いざなきのみこと）・伊耶那美命（いざなみのみこと）の二柱の神が天の沼矛（ぬぼこ）でもって海水を掻く「塩こをろこをろ（塩許袁呂許袁呂）」がある。

「塩こをろこをろ」が実際にどのような音であったかは推測の域を出ないが、天つ神から賜った沼矛で「塩こをろこをろ」と海水を掻き鳴らすことによるオノゴロ島の誕生が、国作りの第一歩となり、その国土は天皇の統治する領域となる。人代になると、「雄略記」天語歌の一節に「水こをろこをろ」と詠み込まれているように、儀式歌での「こをろこをろ」は、天皇の権威を称える寿詞として、人々をオノゴロ島誕生の神話的空間に誘う役割を果たしている。

「塩こをろこをろ」を『記伝』では、「彼〻矛以て迦伎賜ふに随ひて、潮の漸々に凝ゆく状なり」と海水の動きと解釈する。『古事記』英訳の最初の完訳本 *Kojiki*, *or Records of Ancient Matters*（チェンバレン訳）は、『記伝』を参考にしたと思われるが、"...pushed down the jeweled spear and stirred with it, whereupon, ...till it went curdle-curdle,"[(1)]の"curdle -curdle"は海水の動きを描写しながら、その動きに続く音をも表現する。*Kojiki*, *Translated with an Introduction and Notes*（フィリッパイ訳）は、"They stirred the brine with a churning-churning sound;"と「掻きまわす音」が繰り返されることを示す。これは、『記伝』以降、「コロコロのような擬音語」や「海水をかきまわす音」と解釈する『古事記』諸注釈の見解の影響を受けた英訳と思われる。*Kojiki: An Account of Ancient Matters*（ヘルト訳）の"its brine sloshed and swished about as they churned it."（二神がかきまわすにつれて、海水はバシャバシャと水しぶきをあげ、また、シューシューと音を立てながら流れた。）は、独自の感性による英訳で、音を伴った海水の動きやうねりを表現する。

こうした海水の音や動きの描写と、『古事記』が示そうとした意図を結びつける方向で、英訳の可能性を探る。

英語訳の検証に当っては以下の英訳本を参照する。

Kojiki, *or Records of Ancient Matters*, by B. H. Chamberlain（1882 初版）

Kojiki, *Translated with an Introduction and Notes*, by Donald L. Philippi（1968）

Kojiki：*An Account of Ancient Matters*, by Gustav Heldt（2014）

2. オノゴロ島（淤能碁呂島）の誕生

海水を「こをろこをろ」と掻き鳴らすことがオノゴロ島誕生に結び付き、そのオノゴロ島誕生が国作りの始まりとなる。『古事記』神話の始まりに重要な位置を占める箇所であることを捉えながら、『古事記』当該段を読むことにする。

【本文】「淤能碁呂島」段

於是、天神諸命以、詔伊耶那岐命、伊耶那美命、二柱神、修理固成是多陀用幣流之国、賜天沼矛而、言依賜也。故、二柱神立〈訓立云多多志。〉天浮橋而、指下其沼矛以画者、塩**許々袁々呂々**邇〈此七字以音。〉画鳴〈訓鳴云那志。〉而、引上時、自其矛末垂落塩之累積、成島。是、**淤能碁呂島**。〈自淤以下四字以音。〉（是に、天つ神諸の命以て、伊耶那岐命・伊耶那美命、二柱の神に詔はく、「是のただよへる（多陀用幣流）国を修理ひ固め成せ」とのりたまひ、天の沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。故、二柱の神、天の浮橋に立たし〈立を訓みてタタシと云ふ。〉て、其の沼矛を指し下して画きたまへば、塩こをろこをろ（許々袁々呂々）〈此の七字は音を以ゐよ。〉に画き鳴し〈鳴を訓みてナシと云ふ。〉て、引き上げし時に、其の矛の末より垂り落ちし塩の累り積もりて、島と成りき。是、淤能碁呂島なり。〈淤より以下の四字は音を以ゐよ。〉）

「この漂へる国を修理ひ固め成せ」と天つ神より指令を受けたイザナキの命・イザナミの命二神は天の浮橋に立ち、天つ神から賜った天の沼矛を指し下して海水を「こをろこをろ」と掻き鳴らす。その沼矛を引き上げた時に矛からしたたり落ちた塩が累積して島となった。これが、オノゴロ島である、という筋書きである。

実際に修理が果されるのは大国主神の国作りによる。大国主神は少名毘古那神とともに国作りを行うが、

(1) チェンバレンは当該箇所に、"The meaning may also be "till it made a curdling sound."と注をつけているので、音が出るまでの海水の動きと見ていたか。チェンバレンは『記伝』の注釈にほぼ従った英訳を行っているが、その注釈に従わない、または疑問点などがある場合は、彼の意向を注記する。

後に少名毘古那神は常世国に渡ってしまう。その後、海を光して近づいてきた大物主神を御諸山に祭ることによって、その協力を得て、国作りを完成させる。その少名毘古那神との一節に「…故、与汝葦原色許男命為兄弟而、作堅其国。故自爾、大穴牟遅与少名毘古那二柱神、相並作堅此国。(…故、汝葦原色許男命[2]と兄弟と為りて、其の国を作り堅めむ（とのらしき）。故爾より、大穴牟遅と少名毘古那と二柱の神、相並に此の国を作り堅めき。)」(「大国主神の国作り」段）とあり、この神産巣日御祖命の発言による「作堅其国」は当該「この漂へる国を修理ひ固め成せ」に照応すると言われる（新編全集『古事記』)。

その国作りの第一歩としてイザナキ・イザナミの二神によってオノゴロ島が出現する。「淤能碁呂島」について、『記伝』は、『日本書紀私記』[3]の「自凝之嶋也」[4]という説明を引き、二神が生んだ島ではないと記す。以来、「淤能碁呂島」とは、「自凝（おのずから凝り固まった)」ということを名に負う島と言われている。英訳自体には直接関係しないが、上述した英訳本がともに注で言及するオノゴロ島の在所について[5]、『記伝』は、淡路島西南にある小島とする『私記』の説をはじめとして、淡路近辺の島々といういくつかの説を紹介する。近代の研究者からも、淡路近辺の島々が指摘されているが、それに対し、実在の島かどうかを議論するより、あくまでも神話上の島であることを強調する説も多い。

『古事記』の文脈では、二神はこの島に天降り、大八島国を始めとする十四島を生み、次に三十五神を生む。そうした視点に立って見ると、戸谷高明氏が「矛（しかも天つ神から賜った）からしただる海水によってオノゴロ島ができたとしたのは、この島が聖婚の島として重要な意味をもつことになるからである。」[6]と述べるのが首肯できる。『日本書紀』第四段本文では、「其矛鋒滴瀝之潮、凝成一嶋。名之曰磤馭慮嶋。二神、於是、降居彼嶋、因欲共為夫婦、産生洲国。(其の矛の鋒より滴瀝る潮、凝りて一の嶋に成れり。名けて磤馭慮嶋と曰ふ。二の神、是に、彼の島に降り居して、因りて共為夫婦して、洲国を産生まむとす。)」(古典大系『日本書紀』)と、二神が洲国を生むのは潮が凝り固まって出来たオノゴロ島であることを明記する[7]。

『古事記』下巻「仁徳記」黒日売の段に「おしてるや 難波の埼よ 出で立ちて 我が国見れば 淡島 淤能碁呂島 檳榔の島も見ゆ さけつ島見ゆ」（記歌謡 53）という歌謡がある。これは、天皇が淡路島から遥かに望んで歌ったもので、これについて『古事記注釈』（1975、2005）が、「いわゆる国見の歌で、やはり神話上のオノゴロ島をよんだもの。国見は天皇即位の初春の儀にぞくするが、この歌からすると、即位にさいしては原古の創成神話が何らかのかたちで想起されることになっていたらしく思われる。次節に見るとおりオノゴロ島は、国土の創造がそこからなされる神話的原点ともいうべき島であった。」（第一巻、141 頁）と記す。また、新編全集『古事記』では、「…歌は国生みの神話を呼び込み、そのような神話的根源を負う世界を所有するのだと確認して、「我が国」という。世界の始まりからの歴史を引き受ける存在としての大王の風格がそこにある。」（290 頁）と注をつける。両説とも首肯できるもので、つまり、オノゴロ島とは、天皇の存在を保証する神話的根源を意味する空間といえる。

3.「塩許袁呂許袁呂邇〈此七字以音。〉画鳴〈訓鳴云那志。〉」の解釈

本稿の主題である「塩許袁呂許袁呂」については、様々な解釈が見られる。まず、『記伝』では、先に触れ

---

(2) 大国主神には、大穴牟遅神・宇都志国玉神・八千矛神・葦原色許男神（命）の 4 つの亦名がある。

(3) 『日本書紀私記』は平安時代に行われた『日本書紀』講書の内容をまとめたもの。全 7 回の「日本紀講筵」が行われたとされる。

(4) W.G. Aston による『日本書紀』の英訳本、*Nihongi: Chronicles of Japan from the Earliest Times to A.D.697*（1896）では、“Ono-goro-jima”とローマ字表記し、“Spontaneously-congeal-island....”と注記する。

(5) チェンバレンは、“It is supposed to have been one of the islets off the coast of the larger island of Ahaji.”と『記伝』の解釈に拠り、フィリッパイは、“A mythical island mentioned in the Izanagi-Izanami land-creation myth and again in a song by Emperor Nintoku.”と神話上の島であることと仁徳記の歌謡に引用されていることに言及する。ヘルトは“Its current location in the Inland Sea is not known.”と場所を未詳とし、各自、日本語の注釈書を参照しつつ独自の判断を提示する。

(6) 戸谷高明「第九章　イザナキ・イザナミ神による国土の修理固成と聖婚」『古事記の表現論的研究』新典社、2000 年 3 月、534 頁

(7) ただし、紀第四段本文では、天神の指令ではなく、二神が共に計ってオノゴロ島を成したとする。

たように、「さて此の状を物に譬へていはば、膏などを煮かたむるに、始のほどは水の如くなるを、匕もて迦伎めぐらせば、漸々に凝もてゆくが如し、」と海水が凝り固まって行く様子を表現したものとし、擬音語とはしていない。「画鳴〈訓鳴云那志。〉」と「鳴」に「那志」と訓注を施していることから、『記伝』は、「彼ノ浮脂の如漂へる物を迦伎て、稍凝たる物に成なり、鳴は借字にして、成の意なり。即チ書紀には畫成 探 成など書り、」と「鳴」は「成」の意味であると記す。しかし、『記伝』以降、「画は攪であり、ナスはナラスの古語で、鳴くの他動詞」(『古事記注釈』第一巻、139 頁)のように、「画き鳴し」と訓む注釈書が多い。「鳴」は『萬葉集』にもほとんど「鳴く」として用いられており、「(鳴くではなく)鳴し」であるといった注であろう[8]。「時守が 打ち鳴す鼓(打鳴鼓) 数みみれば 時にはなりぬ 逢はなくも怪し」(万 11・二六四一)のような例も見える。

大野晋氏は、オノマトペにクをつけて動詞化する造語法があったことを指摘し、その例の一つに「コロロク(嘶く)」を挙げる[9]。これは「宇士多加礼許呂々岐弖(うじたかれころろきて)」(「黄泉の国」段)とあり、『類聚名義抄』(仏中五一)には「嘶噎」をコロロクと訓む。「嘶」は「馬がいななく」ことであるが、「むせび鳴く」意味もある。「噎」も「むせぶ、むせる」の意。蛆虫が集まりうごめく様をむせび鳴く(嘶く)と表現し、そこに音も感じ取っている。こうした例と同じように、コヲロコヲロも、音であり、また、海水の動きも表現する語であったろう。

また、松村武雄氏は松本信廣氏の漁撈呪言説を引用した上で、「二神は、海潮をかき鳴らすに当つて、おのが志すことを成就させるために呪言を唱へたと考へざるを得ない。」[10]と述べ、この言葉を呪的な唱え言とし、言霊の信仰により海潮が凝りて島になることを祈求したとする。二神が成就を願う呪言を唱えたという根拠を示すのは難しいが、「播磨国風土記」に以下のような話が見える。

> 所以号粒丘者、天日槍命、従韓国度来、到於宇頭川底、而乞宿処於葦原志挙乎命曰、汝為国主、欲得吾所宿之処、志挙即許海中。爾時、客神、以剣攪海水而宿之。主神、即畏客神之盛行、而先欲占国、巡上到於粒丘、而飡之…(粒丘と号くる所以は、天日槍命、韓国より度り来て、宇頭の川底に到りて、宿処を葦原志挙乎命に乞はししく、「汝は国主たり。吾が宿らむ処を得まく欲ふ」とのりたまひき。志挙、即ち海中を許しましき。その時、客の神、剣を以ちて海水を攪きて宿りましき。主の神、即ち客の神の盛なる行を畏みて、先に国を占めむと欲して、巡り上りて、粒丘に到りて、飡したまひき。…)(「播磨国風土記」揖保郡粒丘条、日本古典文学大系『風土記』1971 年 4 月、所収)

これは、韓国から渡って来た天日槍命が、葦原志挙乎命から海中のみの宿りを許された後、海水を剣でかきまわして宿ったという話であるが、やはり海水を掻きまわすという行為に古代人の宗教観のようなものを窺い知ることができる。自分の居場所を確保し、その安全を願うためであったのか。以上のような伝承から推測できることは、音や動きを表すオノマトペに古代人の観想が含まれることはあり得るようである。

4.「塩こをろこをろ」の背景にあるもの

天つ神の指令によって、天の浮橋に降り立ったイザナキ・イザナミ二神は、天つ神から賜った沼矛でもって、海水を「こをろこをろ」と掻き回す。この「沼矛」について、戸谷高明氏は「ヌは玉の意であるが、ヌボコが玉を飾りにつけた矛であるか、ヌ(玉)は美称にすぎないか明らかではない。玉の霊威を考慮するならば実際に玉をつけた矛であったと思われる。」[11]という見解を示すが、最近では、「玉で飾った矛」とする注釈書が多い。『古事記全註釈』(1974)に「玉で飾つた矛(戈)の意。天つ神から国土の修理固成をコトヨサシ(委任)された璽の物で、後に天照大神が高天の原の統治をコトヨサシされて伊耶那岐の大神から賜はつた「御頸珠」及び邇々芸命が豊葦原の水穂の国の統治を天照大神からコトヨサシされて鏡・玉・劔を賜はつたのと同じ性質の

---

(8) 大国主神の系譜段に「鳥鳴海神〈訓鳴云那留。〉」という訓注が見える。鳥鳴海神は、大国主神の子。鳥が渡る、鳴り響く海をつかさどる神の意。(新編全集『古事記』頭注)

(9) 大野晋『日本語をさかのぼる』岩波新書、1974 年、1988 年 4 月、68〜70 頁

(10) 松村武雄『日本神話の研究 第二巻』培風館、1955 年 1 月、201 頁

(11) 戸谷高明氏前掲書(注 6)533 頁

ものである。」（第二巻 上巻編（上）78～79 頁）とあり、納得できる。つまり、天の沼矛は、天つ神から言依さしされた璽の物なので、ヌを単なる美称とするより、「玉で飾った矛」であると解釈する[12]。つまり、天つ神から言依さしされた璽の物にふさわしく、玉も単なる飾りではなく、玉の霊威を生かすべく与えられた矛であったろう。この天の沼矛は、『日本書紀』には「天之瓊矛」とあり、「瓊、玉也、此云努」（神代第四段本文）と注が付く。

さて、賜った天の沼矛を持って天の浮橋に降り立つのであるが、この天の浮橋もいかなるものであったのだろうか。天の浮橋を思わせる逸話に、「与謝郡。郡家東北隅方、有速石里。此里之海、有長大前。…先名天椅立、後名久志浜。然云者、国生大神伊射奈芸命、天為通行、而椅作立。故云天椅立。（与謝郡。郡家の東北の隅の方に速石の里あり。此の里の海に長く大きなる前あり。…先を天の椅立と名づけ、後を久志の浜と名づく。然云ふは、国生みましし大神、伊射奈芸命、天に通ひ行でまさむとして、椅を作り立てたまひき。故、天の椅立と云ひき。）」（「丹後国風土記」（逸文）、同上『風土記』所収）とあり、後にこの椅は倒れてしまうのだが、これも地方の伝承の痕跡であろう。『古事記』における「天の浮橋」については、「神々が天降る時に自ら空に浮いて架かる橋と古代人に信ぜられてゐたもの」（前傾『古事記全註釈』82～83 頁）や、「天空に浮かんだ橋。高天原から地上世界に特別な神が天降るに際して立つ場としてあらわれる。通路ではない。」（新編全集『古事記』31 頁）のような解釈が見える。天忍穂耳命も天の浮橋に立っており、高天原から葦原中国（地上世界）に対して特別な使命を負った神が立つ橋として、天空に出現するようである[13]。

5.「三重の采女の歌」の「水こをろこをろ」との関連性

『古事記』中に「塩こをろこをろ」と類似の表現を持つ歌謡に、雄略記「天語歌」三首のうちの「三重の采女の歌」が知られる。本章では、二つの「こをろこをろ」の関連性について考察する。

「三重の采女の歌」抜粋

纏向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮 夕日の 日影る宮…新嘗屋に 生ひ立てる 百足る 槻が枝は…下枝の 枝の末葉は あり衣の 三重の子が 捧がせる 瑞玉盞に 浮きし脂 落ちなづさひ 水こをろこをろに（美那許袁呂許袁呂爾） 是しも あやに畏し 高光る 日の御子 事の 語り言も 是をば（記歌謡 100）

大御盞に槻の葉が落ちて浮かんでいることに気づかず、伊勢の国の三重の采女は天皇にその大御盞を指し上げてしまう。天皇はひどく怒ってその采女を殺そうとするが、采女はとっさに天皇を言寿ぐ歌を献上する。その結果、采女は一命をとりとめ、たくさんの禄を給わる。普通、豊明などでの儀式歌の中で花や木の葉が盃に浮かぶのは瑞祥として扱われるのであるが[14]、この地の文では「槻の葉が落ちる」ことを無礼なこととして天皇の怒りに結び付けている。盃に浮かんだのであるから、酒の音を表現したものであろうが、液体を広くさす表現として「水」と言ったのであろう[15]。「水（みな）こをろこをろに（美那許袁呂許袁呂爾）」の「美那」は「水＋ナ」、ナは連体の助詞。

「瑞玉盞に 浮きし脂 落ちなづさひ 水こをろこをろに（美那許袁呂許袁呂爾）」の表現が、『古事記』冒頭部の「国稚く浮ける脂の如くして」や「塩こをろこをろ」に画き鳴らして、淤能碁呂島を得たことを想起させる。居駒永幸氏は当箇所について「神話的な想像力によって、酒杯に浮かぶ槻の葉を国土の始源の状態に比喩的に

⑿ 『記伝』では、天という言を上に添えて呼ぶものは、「天より降来し物多し」、また、「又転ては、何となく唯美称て云りと思はるるもあるなり」とやや曖昧な説明をしているが、チェンバレンは、“But Motowori and Hirata credit it in this instance with its proper signification,...”と注をつけ、単なる美称ではなく、「玉」と解釈し、“jeweled”と英訳する。なお、チェンバレンは英訳に当って、本居宣長の『古事記伝』を主に参照し、さらに、平田篤胤『古史伝』など多くの研究書を参照している。

⒀ チェンバレン、フィリッパイ共に、「天の浮橋」の種々の解釈について言及する。まず、チェンバレンは、宣長の天と地をつなぐ“a real bridge”説（「空に懸れる故に、浮橋とはいふならむ」）と篤胤の“Heavenly rock-boat”（天の岩舟）説を挙げる。次いで、フィリッパイは、“boat or raft”, “high ladder”, “a bridge of rainbows”, “the Milky Way”など列挙している。

⒁ 土橋寛「宮廷寿歌とその社会的背景―「天語歌」を中心として―」『古代歌謡論』三一書房、1960 年、1974 年 8 月、194～195 頁／青木周平「雄略記・三重婇物語の形成―儀式歌的視点から―」『國學院雑誌』1976 年 8 月

⒂ 当該箇所の「水」の用い方とは若干ニュアンスが違うが、酒を「水」と表現した例としては、『萬葉集』巻十六の「味飯を 水に醸みなし（水尓醸成） 我が待ちし 代はかつてなし 直にしあらねば」（16・三八一〇）が見える。

重ね合せ、「是しもあやに恐し」と、不思議な現象を現出した天皇の宗教的権威を称えるのである。酒杯に浮かぶ槻の葉の霊異と天皇の権威は融即的につながるのであった。」[16]とし、このような表現のしかたが祭式の観念に基づくものであると述べる。ここは、「酒杯に浮かぶ槻の葉」を「浮きし脂」にたとえたもので、その形状が「国土の始源の状態」を思い起こすものであり、酒杯にそうした現象を起こした天皇の権威を言祝いでいるのであろう。しかし、「酒杯に浮かぶ槻の葉の霊異」に言及したものではないと思う。つまり、「塩こをろこをろ」することによってオノゴロ島が誕生し、そのオノゴロ島は天皇の存在を保証する神話的空間であるならば（第2章）、「水こをろこをろ」は天皇の権威を称える寿詞として機能し、さらに、「塩こをろこをろ」を呼び起こす言葉として、永遠に人々をその神話的空間に誘う役割を果たしているのであろう。

天語歌の成立については、「伊勢の海人部から出た宮廷の語部が「天語部」で、「天語連」（姓氏録）はその族長と思われる。その天語部によって伝承された天皇に対する寿歌が「天語歌」で、元来は伊勢の海人部が臣従を誓う歌として、新嘗祭の場で歌われたものが、雄略天皇の物語の中にはめ込まれて伝えられるようになったものと思われる。」（『古代歌謡集』補注「102 天語歌」）と言われる。また、次田真幸氏は、「高光る」「ももしきの」「真木さく」などの枕詞がほとんど天武・持統朝、またはそれ以後に用いられていることを明らかにした上で、「高光る 日の御子」「ももしきの 大宮人」という句が用いられている天語歌の成立年代を、持統朝（687～696 年）のころであろうと結論づける[17]。

6.「塩こをろこをろに画き鳴して」の英訳

本稿では、これまで、「塩こをろこをろ」の英訳を行うために、その文脈上にある語句の解釈を通し、文脈理解に努めてきた。「1. はじめに」では、チェンバレン、フィリッパイ、ヘルト英訳の相違に軽く触れたが、本章では、文脈全体にわたる三種類の英訳を検証し、その特徴を論じる。

◎チェンバレン訳[18]

So the two Deities, standing upon the Floating Bridge of Heaven, pushed down the jeweled spear and stirred with it, whereupon, when they had stirred the brine till it went curdle-curdle[19], and drew [the spear] up, the brine that dripped down from the end of the spear was piled up and became an island. This is the Island of Onogoro.

Note: “the Island of Onogoro” i.e., "Self-Curdling," "Self-Condensed."

「天の浮橋」は「高天原から特別な使命を負った神が地上世界に天降る際に、天空に出現する橋」（第4章参照）で、“the Heavenly Floating Bridge”。「天沼矛」について『記伝』が、沼は借り字で、玉であると述べている通り、チェンバレンは“the heavenly jeweled spear”と英訳する。当該箇所は単に「沼矛」とあるので、“heavenly”はつかない。「塩こをろこをろに画き鳴して」の箇所は“...pushed down the jeweled spear and stirred with it, whereupon, ...till it went curdle-curdle”と、“curdle-curdle”は海水の動きを描写しながら、その動きに伴う音も感じさせる。チェンバレンは、「彼〻矛以て迦伎（カキ）賜ふに随ひて、潮の漸々（ヤウヤウ）に凝（コリ）ゆく状（サマ）なり」という『記伝』の説明を参考にしたと思われ、「鳴」は『記伝』の解釈通り「成す」の意にとる[20]が、「こをろこをろ」がオノマトペであると認識しており、彼独自の解釈に基づき、音も感じさせる英訳を行っている。さらに、オノゴロ島は“the Island of Onogoro”とし、「自凝」の意味の、"Self-Curdling" "Self-Condensed" という注を付けている。“curdle”は、“To form(milk) into curd; to turn(any liquid) into a soft solid substance like

---

⑯ 居駒永幸「天語歌とかたりごと―「ことのかたりごともこをば」をめぐって―」『日本文学史の新研究』三弥井書店、1984年1月、15頁

⑰ 次田真幸「天語歌の成立と阿曇連」『國語と國文學』1974年12月号

⑱ *Kojiki*, *or Records of Ancient Matters*, by B.H.Chamberlain（1882 初版）

⑲ ［当該箇所の注記］i.e., "till it became thick and glutinous." It is not easy to find in English a word which will aptly render the original Japanese onomatopoeia *koworo -koworo*. The meaning may also be “till it made a curdling sound.”

⑳ 注に、「鳴」は "to make a noise,"（音を立てる）の意と認められるが、" 鳴 is probably only written phonetically for a homonymous word signifying "to become," which we find in the parallel passage of the "Chronicles." と「鳴」は、その訓読の「ナル」の音を借用したもので、『日本書紀』の「凝成一嶋」の語と同様に「成る」の意味とする、とある。

curd;”（*Oxford English Dictionary v4.0*, 2009, 以下、*OED*）液状のものが凝乳のような物体に代わって行く、凝結する、の意である。“The surface of the water is fretted and curdled into the finest waves by the undulations of the air.”（大気のうねりに従って水面はざわつき、見事な波動に凝結していった。）（1794 G. Adams *Nat. & Exp. Philos.* I. vi.210）のような例が見える。“condense”も、凝結の意であるが、“Chiefly in Physics.(Mostly in passive.)”（*OED*）とある。“Ayre condensed is turned into Raine, and water rarified becomes Ayre againe.”（大気は凝結すると雨になり、濃度が低下すると液体（水）は再び大気になる。）（1477 Norton *Ord. Alch.* v. in Ashm. (1652) 77）のように用いられている。なお、「水こをろこをろ」の英訳は、“...falling into the oil floating in the fresh jeweled goblet which the maid of Mihe is lifting up, all [goes] curdle-curdle....”と、「塩こをろこをろ」との整合性をとる。

◎フィリッパイ訳[21]

Thereupon, the two deities stood on the Heavenly Floating Bridge and, lowering the jeweled spear, stirred with it. They stirred the brine with a churning-churning sound; and when they lifted up [the spear] again, the brine dripping down from the tip of the spear piled up and became an island. This was the island Onogoro.

フィリッパイ訳では、「こをろこをろに」を“with a churning-churning sound”とし、「掻き回す音」が繰り返されることを示す。“churn”は、“To agitate, stir, and intermix any liquid, or mixture of liquid and solid matter; to produce (froth, etc.) by this process.”（*OED*）液体や、液体と固形物の混合物をかき混ぜること。“Winds churn'd white the waves.”（風が波を白く掻きまわした。）（18.. Campbell *Poems*, *Dead Eagle* 65）のような例が見られる。オノゴロ島については、チェンバレン同様、"‘self-curdling’ island”と注を入れる。「水こをろこをろ」は、“...Drop, as floating oil, Into the beautiful jeweled cup, Presented, By the girl of Mipe[22], Of the silken garments -, And falling into the liquid, The waters churning, Churning around:”と「塩こをろこをろ」と同じく“churning”を使う。

◎ヘルト訳[23]

So the two spirits[24] stood on the floating bridge of heaven, and when they lowered the jeweled spear to stir the sea below, its brine sloshed and swished about as they churned it. When they pulled it up, clumps of salt dripped down from its tip to pile up into an island. This is Self-Shaped Isle.

「塩こをろこをろに画き鳴して」は、“its brine sloshed and swished about as they churned it.”（二神がかきまわすにつれて、海水はバシャバシャと水しぶきをあげ、また、シューシューと音を立てながら流れた。）と英訳する。“slosh”は、“Of liquid: to splash; to flow in streams.”（*OED*）水しぶきを上げる、次々と流れる、の意。音としては、バチャバチャ（バシャバシャ）、ザブザブ等。“slosh”の用例としては、“The rain poured off them... sloshing in red rivulets round their ankles.”（雨が彼らに降り注ぎ…彼らのくるぶしのまわりを赤い流れになってバシャバシャと水しぶきを上げながら…）（1977, J.le Carré’ *Honourable Schoolboy*, i. 29）が見える。

“swish”は、名詞が“A hissing sound like that produced by a switch or similar slender object moved rapidly through the air or an object moving swiftly in contact with water; movement accompanied by such sound.”（*OED*）棒やむち、または空気や水と接触することで素早く動くものによって生み出されるシューシュー（シュッ）やヒュッという音や動き。動詞になると、“To move with a swish; to make the sound expressed by 'swish'.”（*OED*）

---

(21) *Kojiki*, *Translated with an Introduction and Notes*, by Donald L. Philippi (1968)

(22) Mipe ＝ Mihe. D. フィリッパイは、上古はハ行音をパ行音に発音したと主張している。

(23) *Kojiki*：*An Account of Ancient Matters*, by Gustav Heldt (2014)

(24) G. ヘルトは「神」を“spirit”と英訳する。なお、チェンバレンは“deity”、フィリッパイは神名をローマ字表記（-kami, -mikoto）するが、神全般に対しては“deity”を用いる。

「シュッ（ヒュッ）という音を立てて動く」や「シュッ（ヒュッ）という音を立てる」という意味になる。“The water swishing amongst the pebbles at the far end of the cove.”（入江のはるか先端の小石の間をシューシューと音を立てながら水が流れる。）（*Chamb. Jrnl.* 15 Aug. 1885. 515/2）のような例がある。“slosh”や“swish”は「こをろこをろ」とは音質の違う英語であるが、海水の動きや水しぶきを上げる音を表現していて、読み手の感覚に訴えるには効果的であろう。オノゴロ島については、“Self-Shaped Isle”と「自分で形作った島」という英訳を行っている。なお、「水こをろこをろ」の箇所は、“... in fine silks, of Three Folds[25] is this child, who has been tasked to bear, the lovely jeweled sake cup, onto which, floating like tallow, a leaf has plopped down to drift, sloshing and swishing about.”と英訳し、これも「塩こをろこをろ」の英訳と矛盾しない。

チェンバレン訳は、“curdle-curdle”と海水の固まって行く動きとそれに伴う音を表現する。フィリッパイ訳は、“a churning-churning sound”と、「掻き回して行く音」といった英訳を行っている。これら二例の英訳は原文解釈に準拠したものと言える。ヘルト訳は訳者の感性に拠ったもので、いわば、読み手の文化に則した英訳となる。しかし、ヘルト訳も、例えば、巻末の“Glossary”に“Self-Shaped Isle”（オノゴロ島）を立項し説明を加えるなど、原文の内容に従う姿勢は外さない[26]。また、「塩こをろこをろ」と「水こをろこをろ」の英訳では、三例の英訳とも同じ英語表現を用いるという工夫が見られ、さらに、チェンバレン訳、フィッリパイ訳は、「三重の采女の歌」の注に、この歌謡が『古事記』冒頭の開闢神話に関わることを記す。三例とも独自の方針に基づいた英訳を行っているが、諸注釈書の解釈から大きく外れるものではなく、これが『古事記』翻訳に求められる基本姿勢であろう。次章の「まとめ」では、本稿なりの原文解釈に則った英訳を試みる。

7. まとめ

本稿では、「塩こをろこをろに画き鳴して」を中心に、英訳を行う場合の考慮点として、その音の本質とは何か、自然界の中で果たす役割について考察してきた。

実際にどのような音であったかは推測の域を出ないが、「塩こをろこをろ」とは、音の形態で分類すると、コヲロコヲロなので、清音・畳語形のオノマトペである。柴田武『日本語はおもしろい』[27]（表「同類語の音形態に共通する意味要素」）によると、濁音・半濁音と比較すると、清音の音・声は「澄む、かすか、おだやか、好ましい」、運動の状態は「弱い、静か、小さい、なめらか」等で、濁音の「強い、荒い」という印象と異なる。畳語形の音・声・運動の状態は、「繰り返し、連続、進行、経過状態、畳みかけて勢いが加わるようす」などが挙げられている（同書 104～105 頁）。つまり、コヲロコヲロは澄んだおだやかな音であるが、経過するにつれて勢いが加わっていく音であることがわかる。これは海水が凝り固まって行く経過と重なるであろう。

また、「播磨国風土記」揖保郡粒丘条に、天日槍命が剣で海水をかきまわしてその場に宿ったという話から窺えるように、「塩こをろこをろ」にも事の成就を願う古代人の観想が含まれていることは確かであろう。そうした古代のオノマトペの持つ特性を生かし、さらに、「水こをろこをろ」を「塩こをろこをろ」に明確に結びつけるには、英訳においても「こをろこをろ」という言葉を残すことが効果的であると思う。つまり、英訳には、ローマ字表記 *koworo-koworo* とコヲロコヲロの音を残し、「掻き回す」音であることを強調する。澄んだ穏やかな音とともに出来上がって行くのが聖婚のためのオノゴロ島（The Island of Onogoro）である。

その他、天の浮橋は、『古事記』では高天原から葦原中国に対して特別な使命を負った神が立つ、天空に出

---

(25) 三重：ここは地名（Mihe）であるが、ヘルトは「あり衣の（枕詞）三重」という修辞の意味をとらえて、“Three Folds”と英訳する。

(26) Franco, Javier Aixela は“Culture-specific Items in Translation”（1996）の中で、固有名詞の翻訳法について、起点志向（原文重視）の「複写」から目標言語文化志向の「創造」まで、ST（原文）の異文化要素が保持されている順に 11 種類に分類する。（藤濤文子『翻訳行為と異文化コミュニケーション―機能主義的翻訳理論の諸相』松籟社、2007 年 12 月）翻訳の多様化により翻訳行為がこれらの各分類に確実に当てはまるわけではないが、この分類法は有効であると思われる。従来の原文重視から最近は目標言語文化志向の翻訳も多く見られるようになっている。この中に脚注などの項目もあり、主たる手法と併用して用いられ、異文化要素の保持を担っている。

(27) 柴田武『日本語はおもしろい』岩波新書、1995 年、2010 年 11 月

現する橋であり、英訳本と同様に、“The Heavenly Floating Bridge”、天の沼矛は、天つ神から国土の修理固成を言依さし（委任）された璽（しるし）の物で、玉を飾ったものであるが、ここでは、「其の沼矛」とあるので、“the jeweled spear”とする。最後にオノゴロ島が自凝島（Self-Curdling Island）であることも追記する。「こをろこをろ」には、願望や言祝ぎといった古代人の観想が含まれることと、研究者間の大勢の見解として、オノゴロ島が天皇の存在を保証する神話的根源となる空間であることを注に入れる。確認した語句の解釈に基づいて、以下に試訳を記す。

《試訳》

So, the two deities, standing on the Heavenly Floating Bridge, lowered the jeweled spear and stirred the brine. They stirred the brine with the sound *koworo-koworo*, [a pure churning sound]. When they drew the spear up, the brine that dripped down from its point piled up and formed an island. This is the Island of Onogoro [the Self-Curdling Island].（当該訓読文は 2 頁を参照。）

《注記》

Koworo-koworo seems to have been regarded as possessing a degree of magical efficacy, such that it was intoned celebrations in order to ensure longevity of the celebrants. In addition, most scholars insist that the Island of Onogoro functions as a mythical root of the emperor’s existence because the birth of this island was the first step at making the land where the emperor governs.

※『古事記』原文は真福寺本を底本とし、道果本・道祥本・春瑜本・兼永本・前田本・曼殊院本・猪熊本・寛永版本・延佳本・訂正古訓古事記・校訂古事記を対校本として、新たに校訂を加えたものである。
※訓読文は、上記の校訂本文を読み下したもので、仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一した。
※本論文中、略称で用いた注釈書名は次の通りである。
・『記伝』―『古事記伝』（『本居宣長全集』第九～第十二巻、1968 年 7 月～1974 年 3 月、筑摩書房）
・新編全集『古事記』―新編日本古典文学全集『古事記』（校注・訳者　山口佳紀・神野志隆光、1997 年 6 月、小学館）
・古典大系『日本書紀』―日本古典文学大系『日本書紀 上』（坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注、1977 年 1 月、岩波書店）
※歌謡番号は日本古典文学大系『古代歌謡集』（土橋寛・小西甚一校注、1957 年 7 月、岩波書店）に拠る。